

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	日 置 麗 香（東京都）
学 位 の 種 類	博 士（文学）
学 位 記 番 号	甲 第 88 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 3 項
学 位 論 文 題 目	近代日本の山村部落における青年団 — 山形県及位村 塩根川向上会の「自治」と 「会員相互の向上弥栄」 —
論 文 審 査 委 員	主 査 原 田 敬 一（佛教大学教授） 副 査 鈴 木 文 子（佛教大学教授） 副 査 新 井 勝 紘（元 専修大学教授）

### 〔1〕論文の概要

本論文は、山形県最上郡及位村塩根川部落の青年団である塩根川向上会の実態を究明し、彼らの向上会会員としての活動や退会後の活動を分析することで、青年団という組織やその中で活動することがどのような社会的意味を持ったのかなどを明らかにした研究である。

全体の構成は以下のようになっている。

はじめに 1、問題の所在／2、研究視点・研究方法について／3、先行研究について／4、記録類表記の凡例

#### 第1章 近代日本青年団の生成と全国組織化過程

##### 第1節 近代日本青年団生成の契機

##### 第2節 軍事的国民教化策と青年教育体制の整備過程

##### 第3節 全国連合青年団組織化過程

#### 第2章 地方青年団の組織化と展開—山形県を事例として—

##### 第1節 山形県下青年団の組織化過程

##### 第2節 山形県下青年団の組織と性格—何がどのように変更されたか

##### 第3節 山形県下青年団の修養実践

#### 第3章 塩根川向上会設立の歴史的社会的条件

##### 第1節 東北農村の生活

##### 第2節 塩根川向上会設立の背景

### 第3節 及位村の国有林

## 第4章 塩根川向上会の組織と性格

### 第1節 塩根川向上会と塩根川部落

### 第2節 「会員相互の向上弥栄」実現方法・「共働」・「共有」・「公平」の原則

### 第3節 塩根川向上会の存在形態と及位村青年会との共存

### 第4節 塩根川向上会の「弁論部」・新しい青年をめざして

## 第5章 『塩根川向上会記録群』にみる満州および満州移民

### 第1節 満州移民事業の性格と変遷

### 第2節 及位村における満州事変での戦死者の葬儀とその後

### 第3節 塩根川向上会会員の満州への派兵と満州移民

### 第4節 拓殖講習会と塩根川向上会会員の参加

## 第6章 満州開拓から国内開拓へー塩根川向上会初代会長 佐藤孝治の体験を中心にー

### 第1節 孝治満州へ

### 第2節 「弥栄村」における矛盾の露呈

### 第3節 満州「大八洲開拓団」の建設と運営

### 第4節 「大八洲開拓団」ー引き揚げから国内開拓へー

おわりに

### 〈論文の概要〉

本論文は、東北の一地方の青年団の活動や実態を、一次史料と関係者の聞き取りという方法で解明している。

「はじめに」は、分析課題を塩根川向上会という青年団を対象として、その理念と実態を究明し、彼らの戦時から戦後への活動も追うことによって、その意義を明らかにするとしている。その上で、活用できる史料を位置づけ、青年団に関する先行研究を丹念に解読することから一青年団にとどまる分析が、一般的な青年団史をより深める普遍的意義を持つことを表明している。

「第1章 近代日本青年団の生成と全国組織化過程」は、明治末期に政府が地方青年団の活動に着目し、地方行政組織の末端に組み込み、青年団の全国系統化を推進していく過程を、青年団研究や教育史研究などの先行研究も駆使しながら解明している。

「第2章 地方青年団の組織化と展開ー山形県を事例としてー」は、政府の主導で地方行政に組み込まれた青年団が、具体的にどのように組織化され、事業を展開していったのかを、山形県を事例として分析した。同県では、政府の提示する訓令や規約準則を踏襲して、各地の青年団の組織化を進め、精神修養事業や実業補習教育などに青年団を動員していった。その結果、県立の自治講習所も設立され、青年団は活発化していった。それらが学校史料や青年団史料で具体的に明らかにされている。

「第3章 塩根川向上会設立の歴史的社会的条件」は、及位村レベルの青年団ではなく、

及位村の一大字である塩根川に設立された塩根川向上会の自然的・歴史的・社会的背景を究明した。東北農村の一般的貧困という条件はここでも例外ではなく、また国有林が広く存在することで生活の手段が限られるという実態を丹念に分析したうえで、大字塩根川の青年たちが独自の青年団を組織していった過程を具体的に明らかにした。

「第4章 塩根川向上会の組織と性格」は、塩根川向上会の遺した38点2,000頁におよぶ史料を分析し、その組織と活動の全容を究明した。彼らが理想とした「自治」と「会員相互ノ向上弥栄」の持つ意味を、集落の生産と生活の中から浮かび上がらせ、行政単位である村よりも、大字集落の向上弥栄を強く願う青年像をあきらかにしている。

「第5章 『塩根川向上会記録群』にみる満州および満州移民」は、そうした自治的活動に未来を見ていた青年たちが、1931年以降の満州国設立、国策移民奨励という流れの中で、満州へ向かうことになる、その契機や活動を究明した。25年間の入団者の中から12%の青年が満州移民に踏み切ったという事実は、「向上弥栄」という理想が国策に取り込まれていった結果を示していると、分析している。

「第6章 満州開拓から国内開拓へ―塩根川向上会初代会長 佐藤孝治の体験を中心に―」は、塩根川向上会の創設者であった人物の体験を事例に、塩根川青年会退会後のいわば「大人」になった青年たちの行動を究明した。移民への応募、満州への移住・入植、満州農業の困難と矛盾、新たな移民団の建設と活動などを佐藤孝治だけでなく、入植者の妻たちの聞き取りを使用して、明らかにした。

そのように分析した結果、「おわりに」において、塩根川集落の青年たちが、政治的に公認された青年団に自らの役割期待を感じ取り、積極的に活動を展開したこと、その中で政治的要請とは異なる「自治」と「会員相互ノ向上弥栄」という課題を掲げて塩根川向上会の結成に踏み切り、追求を続けたこと、その一方で青年たちの理想追求の熱意と精神が国家に回収され、侵略と服従に追い込まれていったこと、その中での満州移民は、戦後の開拓事業に新しいエネルギーを与えていったこと、などを総括している。

## 〔2〕審査結果の要旨

本論文は、戦前期社会において大きく位置づけられていた社会集団の一つである「青年団」の歴史的意義を、遺されていた一次史料に基づき丁寧に分析した労作である。教育史や社会学でも取り扱われる「青年団」を、当該社会に置き直し、その誕生から終末にいたるまでのいわば一生を、平面的である活動記録を分析し読み直して、三次元的に再構成し、民衆が戦争に加担していくプロセスを実証した貴重な研究と評価できる。

この論文は、現在の山形県真室川町にたまたま遺っていた青年団史料と出会い、それを丹念に読み解くとともに、それらの史料に登場する人々との接触・聞き取り・教示などを吸収し、史料の「復活」をもめざして、「青年団」という社会組織の全貌を明らかにしようと努力した結果、貴重な成果となっている。

近代日本における「青年団」は、近世社会に自生的に存在した若衆・若者組が、近代国

家と社会に適用するよう改変され、官制青年団となったという負の歴史を持っている。それがために 1945 年以後の戦後改革の中では民主化の担い手として各地で活発に活動するようになる。そうした活動は、婦人会の歴史とも異なっている。ただ現代においては活発に活動続ける女性団体とは異なり、青年団活動は都市部・農村部共にあまり活発ではない。そうした状況下において、「青年団」のもった社会的意味を再検討し、分析することは、政治的年齢が下降する傾向にある現代社会にとっても有意義のものとなるだろう。

教育史の中で「青年団」を扱うことが多かったのも、「青年」という人生の一通過時期にあって、どのように社会を彼らが捉え、また社会が彼らをどのように意味づけて、それぞれ社会的活動に向かっていくのか、を考察しようがためである。「青年」を「大人の一步手前」と捉えれば、責任の軽さともなるが、本論文は、青年たちが自らの責任で、村や社会の改革や発展にどのように向き合ったのかを考察し、いわゆる青年論とも異なった重厚な分析を行っている。1930 年代の満州移民という国策への向き合い方や敗戦後の引き揚げの中で新たな開拓団として茨城県に入植したことなどを歴史的に位置づけることも本論文は努力している。

本論文は、膨大な一次史料と出会い、それらの整理から修復、解読を行うことで、住民の信頼も獲得し、「青年団」の歴史的社会的意義を総合的に明らかにすることに成功している貴重な研究である。

官制青年団である及位村青年団とは別個に、自らの集落である塩根川部落の青年が集まり、塩根川向上会という独立組織の青年団を作り、弁論会や文庫活動など活発な活動続け、自ら「向上弥栄」という目標を立て続け、戦争や不況という社会の荒波に立ち向かっていった姿を克明に追究した点は、本論文の長所である。

ただ在郷軍人会と塩根川向上会との関係や、補習教育と村の指導層、または在郷軍人とのつながりなど、史料上の問題はあるとしても、もう少し意識的に追究されるべき課題がいくつかある。また文庫の蔵書一覧など貴重な史料も発掘、提示されたが、それらをどのように分析できるのか、かならずしも全面展開出来ているわけではない。自覚的な青年団活動を続けていた彼らが、最終的には国策である満州移民の勧誘を受け入れ、「弥栄村」「大八洲開拓団」を組織することになるのだが、それらを、山村の貧困や閉塞感からの脱出、または「国策」という重みや戦局拡大などから説明するのでは不十分である。新しい仮説を立て、本論文では採用されていない文学作品など、より多様な資料を採集して、青年のメンタルにまで掘り下げた分析も必要だろう。統計的な処理にも工夫がいる。大字と小字の関係を整理し、人口統計から対象集落の青年数と塩根川向上会の成員数の関係を明らかにし、より実態に迫ることも可能だろう。

そうした課題をいくつか残しているものの、本論文が「青年団」という組織と活動の解明に大きく成功し、新しいいくつかの事実の発見と、斬新な問題提起を行ったことは疑いのないところであり、審査委員全員一致の結論として、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判定するものである。